

63

『小学紺珠』にみえる医経の引用について

誌上発表

橋本 典子

日本鍼灸研究会

『小学紺珠』10巻は、南宋の儒学者・王応麟（1223～1296）が編纂した初学者のための類書で、元・大徳5年（1301年）に序刊された。書名の紺珠は、唐の張説が紺碧の大珠を得てから記憶力が増進したとの故事に由来する。主な内容は天道・律曆・地理・人倫・性理・人事・芸文・歴代・聖賢・名臣・氏族・職官・治道・制度・器用・儆戒・動植の17類の名数について、多くの引用を元に著されている。なお、本書は方回や牟応龍の序にあるように、編者の遺著である。そのため、各類中の次序は数字順や内容別などで整理されておらず、未完成であることをうかがわせる。

編者の王応麟は、字を伯厚、号は深寧居士、慶元（今の浙江）の人。宋史卷四百三十八に伝がある。九歳で六経に通じ、淳祐元年（1241）進士に挙げられ、西安の主簿に任命された。その後、宝祐四年（1256）に博学宏辞科に及第、累遷して、礼部尚書兼給事に至った。著作は多数に上るが、特に本書と『困学紀聞』『玉海』が有名である。

『小学紺珠』に見える医経経文は、南宋頃の医経の版本状況を候う資料であるので、それを調査し報告する。底本には四庫全書本、『素問』は顧從徳本、『難経』は慶安本と濯纓堂本、『甲乙経』は医統本を使用した。

『小学紺珠』では各項目に関する単語を列記し、その末に細字双行で引用書目とその条文（経文と注解）を載せている。ただし、経文と注解を区別する標記は無い。医経の引用は、巻一・天道類（2）、律歴類（4）、巻三・人事類（2）、巻四・芸文類（1）、巻十・動植類（2）に見られる（丸括弧内の数字は所出回数、以下同じ）。

書目別引用回数と所出箇所（類文や抜粋も含む）は次の通りである。『素問』（9）は四気調神大論篇第二（1）、六節藏象論篇第九（2）、藏気法時論篇第二十二（2）、天元紀大論第六十六（1）、六元正紀大論篇第七十一（1）、所出不明（2）が引かれている。その内、王冰注を含む引用が四条ある。『難経』（2）は一難、十八難、『甲乙経』（1）は皇甫謐の序文（ただし書中では『甲乙経』の表記はなく「皇甫謐曰黄帝創制於九経」とある）が引かれている。書目別の引用内容は、六気、九宮、七十二候、五運六気、二始二終二中、四気、九候、五果、五菜は『素問』、百度、九候は『難経』、黄帝九経は『甲乙経』からそれぞれ引用されている。ただし概ね暦や時間、植物に関する言葉であり、陰陽や五行における引用は無い。

『小学紺珠』の引用とそれに対応する原文との比較を行うと、『難経』『甲乙経』では大きい異同は無いが、『素問』では王冰注を含めた抜粋が多く、校勘の一助となる資料となる可能性がある。ただし、例えば「二始二終二中」01-50b08～51a01に引かれた「立端於始（立首氣於初節之日）、表正於中（示斗建於月半之辰）、推余於終（退余閏於朔望之後）」は、典拠である『素問』六節藏象論篇第九 03-04a02～05では「立端於始表正於中推余於終而天度畢矣（端首也始初也表彰示也正斗建也中月半也推退位也言立首氣於初節之日示斗建於月半之辰退余閏於相望之後……）」となっており、先述の通り経文と注解の区別を示す標記が無いため、経文と注文の区別は簡単ではない。しかし見方を変えれば、重要な部分のみを抜粋し端的に内容をまとめることで、まさに初学者の備忘としての資料として有用であるといえることができる。